

## 第6回「泉大津市オリアム随筆賞」

### 【オリアム随筆賞（最優秀賞）】

#### 最後の卒業式

菱川町子・愛知県

「左半身麻痺が回復した人もいます」

という医師の言葉に望みを託し、五時間に及ぶ手術に耐えたのに、神は無情にも夫に背を向けた。手術をして十日後、嚥下障害を起こして食べ物や飲み込むことが困難になった。喉や舌が麻痺して、しゃべれなくなった夫は筆談で「食べる事を忘れてしまったようです」と書いた。

しかし、輸血を機に病状は好転し、再び言語訓練と手足の機能回復訓練を始められるようになった時、当時夫が担任していた高校生の卒業式は目前に迫っていた。卒業式には出席してほしいが、夫がぶざまな姿をさらす結果になるならいっそ欠席した方がいいかもしれないと、私の心は揺れていた。しかし単調で重苦しい闘病生活には変化や目標が何よりの薬になると、出席を決断した。希望は人に力を与えるのであろうか。夫は体育館での卒業式に出席することは無理だが、教室で生徒に卒業証書を渡すという形で出席できるまでに回復した。早速卒業式に着るスーツをチェックしたところ、問題はネクタイだった。左手が自由に動かせない夫は自分でネクタイを締められない。そこで私は妙案を思いついた。まず男の人にネクタイを締めてもらい、ほどかずに首の後ろに当たる部分を切る。そしてマジックテープを縫い付ければ十秒で装着完了となる。私立男子校の教師である夫は、この黒のダブルのスーツを着て入学式や卒業式で教え子を見守ってきた。今年で定年を迎える夫にとってはこれが最後の着納めとなる。

前日に理髪店で散髪し、ワイシャツ、マジックテープ付きのネクタイ、黒のダブルのスーツで卒業式の正装をした夫は、背筋もシャンと伸び教師の顔になった。予約したタクシーに車椅子を積み込んで学校に着くと、式は既に始まっており校舎内はしんと静まり返っていた。脳梗塞で倒れる前日まで夫が教師として過ごした教室に誰もいなかったが、黒板に書かれた「菱川先生、ありがとうございます」の文字が温かく迎えてくれた。廊下の辺りがなんとなくざわめき始め、体育館での卒業式が終わった気配を感じて、私も夫も不安と期待で緊張した。生徒達はどんな顔で迎えてくれるだろうか。夫は最後まで、舌がもつれることなく挨拶することができただろうか。言語訓練の先生の助言で緊張してしゃべれなくなった時に備えて、はなむけの言葉は印刷して全員に渡せるように用意してあるのだが……。生徒達は教室に入るなり車椅子に座っている夫の姿を見て、

「先生！」

と口々に言いながら駆け寄って来た。それは久しぶりに会った父親に話しかけるような、

無邪気で自然なものだった。医師や看護師にすぎるとは思えない無力な病人が、生徒の温かいまなざしに取り囲まれて顔つきも言葉遣いも教師そのものだった。全員が席に着くと学級委員が、

「起立！礼！」

と号令をかけた。夫はまだ一人では車椅子から立ちあがることができない。あわてて駆け寄った私の目に飛び込んだのはすくっと立った夫の姿だった。すっかり教師に戻った夫を残して私はそっと廊下に出た。私が無遠慮に侵入してはならない夫と生徒の聖域のような気がしたからだ。しかし、教室内の様子が気になってガラス越しに覗いてみると、全員が夫の話当真剣に聞いているようだ。男ばかりのクラスはこんな特別れを惜しんで泣いたりせずに、明るくさばさばと別れるのだろうかと思つて見ていると、思わず息をのんだ。なんと手の甲で涙をぬぐっている生徒がいるではないか。やがて夫の話が終わり、代表の生徒がお礼の言葉を言っているようだ。彼は時折感極まった様子で天井を見つめ、肩を震わせ、顔をゆがめて必死で話していた。その後の生徒は床を見つめ目をしばたかせ、隣の生徒は机につつぶして泣いていた。十七、八歳の生意気盛りの若者が夫とともに涙を流しているではないか。

この三年間に夫がつくりあげてきた生徒との固い絆を信じ切れず、ひよつとしたら冷笑されるかもしれないと思つた自分を恥じた。こみ上げてくる感動の波にもまれ、誰もいない廊下の片隅で声を殺して泣いた。地道に教師の道を歩んできた夫の誠実な姿を、今になって知るとはなんとうかつだったことか。

六カ月に渡る苦しい闘病生活だったが、たった一日だけ黒のダブルのスーツを着て車椅子で卒業式に臨んだあの日が、夫の教員生活を通して一番幸せな日だったかもしれない。校長や教頭の地位になった同期の人が多く中で、夫はそのやさしさ故に他人を押しつけてまで要領よく立ち回ることもできず、不器用に生涯一教師を貫いた。若き日に教師になりたいと熱っぽく語つたその情熱を最後まで持ち続け、教え子の卒業を見届けた三カ月後、静かに人生の幕を引いた。